

# 勝林寺々報

(二月のことば)

欲望には悪いがあり  
出離の道にはやすらぎがある

カピラ城の淨飯王（ジョウボン王）は太子の誕生をよろこび、シッタルタと名命してひたすら将来を期待しました。しかしにその太子は、成長するにつれて、人生の底をじつと観察し、人間苦惱の根元をみつめて深くもの思いに沈む青年になりました。

このようにしてお釈迦様は、「四門遊観」の物語に伝えられるような、出家への道へ傾いて行かれました。太子は城中の繁華さに堪えかねて、時おり馬にまたがつて城外を見まわつて歩きました。まず、東の門を出てそこで見たものは、歩くことさえ困難な老人の姿でした。次に南の門を出てそこで見たものは、あえぎ苦しんでいる病人でした。そして次に西の門を出て見たものは、死者をはこぶ悲しい葬送の列でした。太子は、その人々のあわれな姿にとまどいました。

咲いた花はいつかは散る。元気きかな青壯年の時もそう長くは続かない。生れたものはやがて死におもむく。人のおい求める欲求も一時の夢であります。これらを解決せざして、ほとととの人生はどこにあるだろうか。その底にはだれしも深い苦惱を秘めています。これがほんとうに人生はあります。

太子はそこに大きな行きづまりを感じられたのでした。

その様子をじつと見ていた太子は、「あゝ、生

いうれいに沈みました。  
このようにして、弱肉強食、互いに殺し合ひ他のものゝいのちまで奪い取らなければ生きることができないとしてみると、いのちを生きる限り、生物は恐怖と不安から離れることはできません。

がてしかし若いお釈迦様は、四門遊観の最後に、北の門を出られましたが、そこで初めて修行者のだけかい姿に出会われました。そしてそのけり高かさに深く心打たれ、出家の決意を固められたといわれます。

人はみな、生きることにからりはてゝいるのですが、その生きようとしているまゝが、実は死ににつゝあるということです。ですから、ほんとうに安心して生きようとするとき同時に、安心して死ぬことのできる決着を、見出していくなければならぬのです。また、人はだれでも平和を願い愛し合つて生きることを求めるながら、しかし実際は、憎み合いかねません。そこには私のいのちの底に根ざしている「我執」（エゴイズム）がいつもはたらいていることに気づきます。「煩惱」といわれる心です。これがなかなか落し合い争い合わねば生きていけません。そこには私のいのちの底に根ざしている「我執」（エゴイズム）がいつもはたらいていることに気づきます。前が「生死の問題」、後は「煩惱の問題」です。

## 生死出ずべき道

我執は人間の本性です。これが元になつて、かとれません。私は「我執」（エゴイズム）がいつもはたらいていることに気づきます。前が「生死の問題」、後は「煩惱の問題」です。

この二つの問題をかゝえて若いお釈迦様は悩ます。おれだけならまだしも、「あの人よりも私がいます。『煩惱』といわれる心です。これがなかなか落し合い争い合わねば生きていけません。そこには私のいのちの底に根ざしている「我執」（エゴイズム）がいつもはたらいていることに気づきます。前が「生死の問題」、後は「煩惱の問題」です。

この二つの問題をかゝえて若いお釈迦様は悩ます。おれだけならまだしも、「あの人よりも私がいます。『煩惱』といわれる心です。これがなかなか落し合い争い合わねば生きていけません。そこには私のいのちの底に根ざしている「我執」（エゴイズム）がいつもはたらいていることに気づきます。前が「生死の問題」、後は「煩惱の問題」です。

とよろこんでいます。

## 無明煩惱を転じて

ほとけのこころいただくは  
なむあみだぶつ  
おがまれること  
さいちがほとけに  
さいちがほとけを  
おがむじやない  
さいちがほとけに  
なむあみだぶつ  
おがまれること

## 生死出ずべき道

## 一月

## 二月

## 三月

## 四月

## 五月

## 六月

## 七月

## 八月

## 九月

## 十月

## 十一月

## 十二月

## 一月

## 二月

## 三月

## 四月

## 五月

## 六月

## 七月

## 八月

## 九月

## 十月

## 十一月

## 一二月

祭壇正面には焼香用の机をしつらえ、それに香炉と香入れとを置き、香炉には炭火を入れて、焼番のできるようにしておくべきです。

葬儀の前夜には「お通夜」をおつとめします。この夜は、故人の遺体がこの家にある最後の夜です。

したがつて今夜のおつとめは、これが故人といつしょにする最後のおつとめという意味をもつています。

つね日ごろ、故人といつしょにおつとめをさしていただいていた（もしそうでなければなおさらのこと）家族の者はもちろん、これまでその機会のなかつた親族縁の者・知人・友人も、せめてこの最後の夜のおつとめだけは故人といつしゆにと、つとめるのが「お通夜」です。

ですから「お通夜」でのおつとめは、「正信偈」でも「阿弥陀経」でもなんでもよろしいが、大切なことは、みんなが浄土真宗の聖典をひらいて、たとい一言半句でも、ともどもに声を出しておつ

「お通夜」のこと



勝林寺本堂  
大屋根葺替 大工事 はしもと

すとは言うものの、ことに屋根の瓦は  
すでに寿命尽きております  
このことはすでに十年も前に専門家  
から度々厳しい注意を受けていたところ  
でした。しかしここ十一年來、勝林寺は次々に  
とり組まねばならない緊急のことがあ  
りました。とてもその上このごとまで  
ご相談できる状況にはありませんでし  
た。

およほとんど大きな修復もなくて今日にそれから八年ほどであります。建てものも、これで今は、不思議といふはあります。わいに、ご門徒の屋根屋さん、近所の親切さん、その他内外の人々の不思議といふはあります。まさに、おれません。

四月一日 江戸着工予定

着工予定

- (1) 本堂大屋根葺替え事業は委員会提出の見積予算により実行することを確認。  
(2) 基本金積立をこの事業に使用することを認承  
(3) 算財は寄附による。  
(4) 寄附については  
1 「趣意書」を配布（他出門徒縁故にも）  
2 地区毎に「推進委員」を委嘱し推進を  
3 はかる。  
4 地区毎に寄附帳を回し記帳。  
5 寄附金納入は五月末までとする。  
6 寄附札を本堂に掲げる。

て進めたいと思ひます。『勝林寺報』を軸に、ご門徒とのコミュニケーションを強化したいと想ひます。仏事・仏婦の活動がこの『寺報』に乗つてひろがり活発化していくよう工夫したいと思つています。

2  
昭和五十七年度のねがい

五ヶ年間分割拠出した本堂、庫裡改築資金が完納され、基本財産会計に戻入されました。また隣接地取 得代金も支払い勝林寺への登記も完了し前住職・坊主一生涯現在の高木五六四二、七二三円、内に伴う葬儀以降の行事等、皆様のご懇意により厳しく追贈なくおつとめ致しました。

あらためて厚く御礼申します。

明年度、教化費・予備費に残余が出ましたので、明年度へ三九八七八円繰越すことになりました。

二月十四日（日）午前九時  
勝林寺にて  
議題　左記の事項  
右ご案内申し上げます

二月十四日（日）午前九時半  
代謨員会